

第二期 第六十五号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2021. 12. 20 定有堂書店 発行

三砂慶明さんの「千年の読書」

奈良 敏行

鳥取と東京と偶然と

ワクサカソウヘイ

正しいことができない日記

鳥居 貴彦

汽水のほとりから (9)

小原 修治

鳥取と東京・妄想の駅そば旅

萩原 俊郎

迷いこむ靴下

森本 龍哉

宇宙をめぐるって

松田 裕史

あとがき稼業① コロナ禍での出版

芝野 浩貴

八代日記 (二十一)

齊藤 仁昭

あなたは…誰ですか

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その六十四

内田 克彦

「山椒魚」 舞台と音楽

秦阜 梅林

私の人生は旅に出るから考えようと思う

三浦 永理

背負って生きる日々

ドラメラア

…… 編集後記



三砂慶明さんの「千年の読書」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

年明けに刊行される『千年の読書』のグラ刷りが、誠文堂新光社から届いて読んだ。著者の三砂さんは気になる人だ。読書家で本についての知識が深く、大きな書店で目利きとして活躍している。気になりつつけていたのは前に「私は本に人生を何度もたすけられてきた」という発言を目にしていたからだ。その一言を中心に、この本について考えてみた。

この一言は、時間をかけてなんどもなんども聞いてみたい事柄だ。幸いこの本はこの言葉から始まっていた。しかしここから始まった以上、語り尽くすには「千年」の時を要するのかもしれない。また、どういいういきさつだったか覚えていないが、いろいろ質問を重ねたとき、答えて代えて、「耽読者の家」を読んでみたらいいですよ、と教わったことがある。筒井康隆の『壊れた指南』の中の短編だった。これは読書の概念をひっくり返す衝撃の物語だった。

家中が蔵書に埋もれ、数人の住人が読書しつづけるだけの話だった。それだけの設定なのに、この読書は千年つづくと思われた。これも、本に人生をたすけられる、という事態だろうか。三砂さんの『千年の読書』もそういう世界だった。

読書は果てしない迷宮なのだろうか。読書は心の旅路だ。だから何処へも出かける必要はない。「何でも知りたい。知ってどうする」という細かい疑問はかえりみず、ただ知りたい。私たちの知りたいことに終わりはありません」と、三砂さんは、その「本」と「人生」の迷宮を語る。作家保坂和志の言葉をかりて三砂さんは、読書とは読んでいる精神の駆動そのものだともいう。わたしが最初に興味をもち知りたかったのは、三砂さんが「本」にたすけられた「事実」の数々だった。そんな経験をした人のエピソードは想像しただけで面白そうだ。この本の中で具体的なエピソードは一つだけだった。しかしわたしは間違っていた。三砂さんがいたかったのは、じつは本が精神を駆動するその限りにおいて生きられる、という秘密だったのかもしれない。

本を読むことと山に登るのは似ているだろうか。高揚感という点では似ているのかもしれない。しかし征服する山頂というものは読書にはない。でも登山家も「登っている

とき何を考えているの？なぜ登るの？」と聞かれても答えようがない。登っている瞬間にこそ行動と思考が一体化していて、この生きられる瞬間を語ることは容易ではないし、必要があるとも思えない。そう考えていたら、そういう「一体化」について『フロー 喜びの現象学』で解き明かされているのを知った。

「フロー」というのは「一つの活動に深く没入しているので他の何ものも問題にならなくなる状態」で最適経験（自分の最高の状態）ともいうらしい。流れにのっている感覚だ。『千年の読書』にはそんな流れがほとぼしっている。フローは、三砂さんが見出した、二百数冊の書物の奔流にある。読書の体験とは、そこにある情報との出会いではなく、山を登っているときのその瞬間の体験のように、読んでいるそのときの精神の駆動（高揚感）そのものなのだ。三砂さんはその「駆動」を自在にあやつる。

ところで『フロー』の著者は、「快樂は生活の質を構成する重要な要素であるが、それ自体は幸福をもたらさない」という。「フロー」の状態は快樂の追求ではなく「楽しいこと」の追求だと注意を喚起する。「楽しさ」の中には心理的エネルギーの躍動があり、自分を変え、自己を成長させる力がみなぎっている。「快樂」は人を停滞させるが「楽しいこと」は人を成長させる。そのところを三砂さん

は「読んだとき世界の見方がかわりました」とくり返す。読書は一時的な快楽とは異なり、読後に人を変成させる力としてある。その変成と幸福はひとつことだ。

目的は外部にいらぬ。「自己目的的自己」でいい。

例えば歩行（ウォーキング）は目的地を設定するが、舞踏（ダンス）はどこへ行くわけでもない。踊りつづけるその中に喜びと幸福があるだけだ。本をたくさん読んで何処にいく？ そして何をする？ 本にたすけられなければならなかった人間は、どこかで自分自身の初期設定そのものを、フロアの世界へと変更（転回）させた人間だ。その転回を、三砂さんは、「たすけられた」といったのかもしれない。

2021. 11. 06

（参考）

三砂慶明『千年の読書』誠文堂新光社 2022

筒井康隆『壊れかた指南』文春文庫 2012

ミハイ・チクセントミハイ『フロー体験 喜びの現象学』世界

思想社 1996

太極拳教室（会場 定有堂二階 葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）
毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

鳥取と東京と偶然と

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

長く生きていれば、それだけ色んなことがある。

だらしなくも、三十八年ほど生きてしまっている。自然、様々な偶然に出くわす機会も多くなった。それはかつて起きたことが点となり、線となり、伏線回収みたいな形で偶然として姿を現すようになったということだ。そんな齡三十八で体験した偶然の話を、これから連載形式でたらたら綴っていくこうと思う。寝ている時に見た夢の話を聞いている時の塩梅で、どうでもいいことを耳にしている気分になっていたただけなら幸いです。

十年ほど東京と鳥取を往復し続ける生活を営んでいる。ところがこのたびのパンデミックとやらで移動がかなわなくなり、私は東京の家に一年間ほど引きこもっていた。人とも会わずナメクジのように糸をひきながら暮らす日々は

非常に不健康で、やがて私は不眠症などに悩まされるようになった。物を書くのも億劫になり、『音信不通』の連載は休ませてもらうことにした。私は鳥取とまさしく、音信不通になったのだ。

さて、そんな鬱屈とした日々の中で、私は「Mister」の「スペース」という機能と出会った。クラブハウスのな、音声でフォロワーたちと会話をするのできるシステムである。人と顔を合わせて会話するのはめんどくさい時期だったが、電話的なことであれば前向きになれた。私はおそるおそる、それを試すようになった。

夜、作業をしている時に、タイピング音を「スペース」で発信する。ただそれだけの行為に、五十人くらいが集まる。不思議な体験である。たまに話しかけてくれる人がいる。大阪の女子高生は「物書きになるにはどうしたらいいのか」という相談を寄せてくれた。北海道の生き物系アクセサリーを作っている方からは「あなたはいつから鳥のことが好きなのですか(私はかつて鳥の図鑑を上梓している)」という質問を与えられたりもした。カタカタとキーを叩き、たまにぼそぼそと喋る。いままで生きてきた中で、こんなにも豊かな夜は味わったことがなかった。私は三日に一回は「スペース」を繋ぐようになり、気づけば不眠など遠い彼方へと消えてしまった。

ある時、スペースに吉田さんという方が現れた。それは鳥取出身の歌人の方で、話しているうちに、かつて定有堂の奈良さんが私と繋げようとしていた人物だということが発覚した。その方は、先日に妖精大図鑑というダンス／コントユニットのライブに足を運んだという。なにを隠そう、その舞台のプロデューサーこそが私で、つまり私はすでに吉田さんと劇場の受付で会っていた。お互いに気づいてはいなかったけれども。

なんとも奇妙な偶然に驚きつつ、静かに会話を交わした。その中で吉田さんは現在東京の北区にお住まいだということとが判明した。私は北区の都立飛鳥高校に通っていたので、しばらくその話で盛り上がった。すると「EPO」が飛び込んだ。

「僕も都立飛鳥高校です！」

それはスペースを聞いていた、ヤマザキのコンピュータという男であった。彼はパンクロッカーにして投資家、そして私と同じく文筆家で、素晴らしい本を上梓している年下の人物である。とある出版社での編集担当さんが一緒であることから知り合い、こんどの十二月に鳥取の汽水空港でトークイベントを一緒にやることが決まっていた。

なんだよ、ヤマザキくん、後輩かよ。

「僕はパンクロッカーだから、ミュージシャンで年上の

人からやけに先輩面されることが多くって、それに辟易していたんですけど。でもガチの先輩であるワクサカさんからはもう逃げられないな、と思いました」

ヤマザキくんは、笑ってそう話した。吉田さんに一連の流れをまとめて話すと「へー」と言っていた。他人の偶然の話は、基本的には本人以外にはどうでもいい話である。この話に、取り立ててオチはない。生きるということとは、ノイズの混じった偶然の連続を飲み込んでいくということである。これから、そういう話をこの場所ですべて話していきたいと思う。

というわけで、一年半ぶりに帰って参りました。覚えている方も、覚えていない方も、どうぞよろしくお願いいたします。汽水空港のイベント、久々の帰鳥となりますので、是非お立ち寄りください。あ、定有堂で売っている拙著『ぶざける力』、ひとり五冊は買ってくださいね。

ただいませす。

正しいことができない日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

ギラギラとした金箔と漆塗りの壁を眺めながら区役所のエレベーターを待つ。いつ来ても落ち着かない空間。おばあさんの乗った車椅子を押してきたおじいさんが、投票所の入り口で「ここからは本人以外の人は入れません」と止められている。誰も押すことのなくなった車椅子は動かない。おばあさんも動かなくなってしまった。期日前投票。政治について思うところはいろいろあるのだけれど、わざわざ言いたいことはなにひとつない。正しいことを声高に叫ぶ人がたくさんいるなと思う。「一票で政治を変えよう」とかね。投票には行った方がいいよ。生活と政治は無関係ではないから。でも、その権利を行使するのは「正しいこと」ではないのではないか。投票しない人は「ダメなやつ」で、「投票しようね」と他人に迫ることは「いいこと」なのか。そのへんがよくわからないのですべてにおいて思考

が停止してしまう。政治はこの国をつくってるのだから。だけどこの国をつくってるのは政治だけではない。正義には影がある。大きな声を出していると他人の声は聞こえない。いまあってほしいものは「正しさ」ではなく「当たり前」の感覚なのだと思う。他人が投票所についてきたら公平な選挙ができなくなる、それは正しいことだ。だけど、車椅子を押す人がいなくなったら車椅子は動かない。それは当たり前のことだ。

三歳の息子が店の前の道路に木端を広げている。右から順に「こまち」「かがやき」「のぞみ」だという。違いはわからない。少し目を離れた隙に、三台の新幹線はすべて昆虫凶鑑の外函に頭から突っ込んでいた。それ、全部売りのなんやで。やめてくれるか。ぶどうのグミを食べるか、ももジュースを飲むかが毎日の生活の最大の争点。この人に投票権を持たせようという人はいないだろう。だけどこのひとも生活をつくっている。自分と、誰かの。

朝、保育園に入りたくないと言ったところをぐずっている。「いっしょにいこー」と同級生が声をかけてくれた。不機嫌な三歳児にはそんなやさしさも届かない。あろうことか迎えに来てくれた子にパンチする。二人とも泣く。ごめんなあ。

三日後、同じ子と保育園の門で出会う。はらはらと見守るおとなをよそに、「ちよつとまつてー」と二人は仲良く教室に入っただけだった。世の中の全ての争いがこうだったらどんなにいいだろうか。

年齢、国籍、その他いろいろ。政治にはどこかに線引きがある。ここから先は入れません。関係者以外立ち入り禁止。この国をつくっている、この国に暮らす人であっても参加できないことがある。政治には参加できないが、一緒に暮らしている。外国人がこの国の政治に口を出したらダメだ、それは正しい意見なのかもしれない。子どもや外国籍の人たちと日々を暮らしている、それは当たり前のことだ。

店には誰だつてやってくる。おとなも子どもも。遠くの人も近くの人も。マスクをしている人もしていない人も。誰でも入れるように、戸を開けっ放しにしている。寒くて仕方ない。

二十五日、北野の天神さんに行く。人混みの中で招き猫と目が合った。手を伸ばしてみるとそばで立ち話をしていたおっちゃんが「これも一緒にしとくわ」という。手渡されたのは茶色いトラネコの置き物だった。招き猫とは雰囲気

気もサイズも全く違う。強引すぎるセット販売。文脈も7. なにもない。「おきもんやこれはな、置いとくんや。家に」とよくわからないセールストークが続く。包んでもらえますか、というとおっちゃんはゴソゴソと新聞紙を丸め、招き猫とトラネコは三倍くらいの大きさのモコモコしたかたまりになった。「これで割れへんからな」とビニール袋を受け取り雑踏を歩き出すと袋の中で二匹のネコがぶつかりかちやかちやと鳴った。割れるやるこれ。期待を裏切らないダメさがうれしい。

招き猫は磨いて消毒液のボトルの横に置いた。引き戸の上、誰も気が付かないところには友人が送ってくれたステッカーを貼った。「VOTE!」と書かれている。誰かに見てほしいわけではない。何かを言いたいわけでもない。ささやかに、毎日、当たり前そこにあって欲しい。



汽水のほとりから (9)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、鳥取市にある天徳寺の「寺市」に初めて参加した。小春日和の午後、本堂脇の仮設テントには梨や柿といった季節の果物や、近在の野菜などが格安で販売されていた。本堂の正面には、カレー屋の屋台と珈琲屋のブースが出て幸福な匂いを漂わせていた。個人的にはここに本屋さんが加わると最高なのだが……。実は当初その予定だったのが、出店するはずの「汽水空港」が来る途中で車がエンストし、間に合わなかったのだ。とはいえ、店主のモリテツヤくんはスペシャル対談のゲストでもあり、遅刻して登場した。今回の対談についてポスターの触れ込みに「湯梨浜町で本屋を営みながら、常識にとられない生き方を実践する哲学者と住職のコラボトーク」とある。企画した天徳寺の宮川住職にとってモリテツヤくんは「常識にとられない生き方を実践する哲学者」なのだ。だが、そもそも彼は何者なのか、私の知っている範囲で少しだけ紹介しよう。

今から七年前、彼は東郷湖畔にあるオモチヤ屋の倉庫で寝起きしつつ、そこを改造して本屋を開いた。近所に住む私は、開店以来毎日のように足繁く通い、常連になった。「なんで本屋やろうと思ったの」と初めて聞いた時には「本を売ることに罪悪感がないから」と言っていたが、親しくなると「本は今まで生きて死んだ賢者たちの記録。良い本がそばにあるだけでわくわくする」と自身の体験を語り始めた。「汽水空港」のルーツは東京の下北沢にある「気流舎」である。古着を買いによく遊びに来ていた街で、その怪しげな外観が気になる小さな店に足を踏み入れた彼は、書棚に並んだ本たちにたちまち魅了されてしまう。

最初に買った本はレイモンド・マングロー『就職しないで生きるには』(晶文社)。自分の悩みに答えてくれそうなタイトルに救われる思いだった。それ以後、店に通いつめ、店主とも親しくなり、やがて自分でも本屋になる夢を抱くようになったが、そのことを店主に打ち明けると「本屋は食えないからやめておけ」と反対されてしまう。それでも夢を諦めきれなかった彼は、お金がなくても生きていけるように自給自足の農業を足場に本屋をやるうと思いつく。大学卒業後、農家に住み込みでノウハウを学び、翌年には栃木県にある海外留学生向けの農村指導者育成研修学校のインストラクターになるが、一年間の任用期間を終え

るまさにその日に東日本大震災に遭遇する。放射能を避けるように西へ向かい、数ヶ月間は京都にいたが、まもなく縁あつて鳥取へ移住し、紆余曲折の末、今の地に落ち着いた。

現在、彼は自宅近くに農地を借り、そこをターミナル2「食える公園」と名づけ、仲間と共に作物を栽培している。

自らの農地を「コモン」とするプロジェクトだ。が、更に彼の理想は、「コモン」外の間、たとえば腹を空かせてここへやって来た旅人が自分たちの育てた作物を勝手に食べてしまうような事件の到来にある。そうなることで、労働と対価・所有と権利・贈与と報酬などといった社会の常識に風穴を開けるような物語が既成の事実となることを望んでいるのだ。彼はこうした自身の考えが狂気と揶揄されることは百も承知である。故にこれを「信仰」と呼び、自身の実践の日々の継続を「信仰を編む」と表現している。思うに、彼が世間に対して決してひるまないのは、世間もまた拝金教と言うべき別の「信仰」に毒されており、同じ「信仰」ならば、義は我にありと考えているからだろう。今回の住職との対談でモリくんが話題にしたかったのも「信仰」だったようだ。彼は精神世界全般に興味を持ち、宗教に魅かれ、とりわけ仏教には強い関心を抱いてきた。京都にあるヴィパッサナー瞑想センターを訪れた経験もあ

る。彼が「気流舎」で学んだ教養は米国のビートニクやヒッピーといった人々のカウンターカルチャーをベースにしており、彼らの精神文化には仏教の影響もある。禅が世界的にZENと日本漢字音で表されることからわかるように、そこには海を渡った日本人僧侶たちの長い歴史もある。そうした先達の一人、今も米国で活躍の奥村正博老師の代表作『REALIZING GENJOKAN』を宮川住職がこのたび翻訳され、『「現成公按」を現成する』（春秋社）と題して上梓されたことは、その意味でタイムリーなことに思われたが、残念ながら対談では話題にならなかった。

「汽水空港」の存在に驚いたという宮川さん。思うに、今回上梓された本の序文で、著者の奥村老師は道元禪師の『正法眼蔵』『現成公按』巻を理解することの意義として「菩薩行としての坐禅と日々の実践の理解を深めていく」重要性について述べておられるが、宮川さんはモリくんの生き方の中に「菩薩行」の実践を窺っておられるに違いない。そしてその意味では、今回私が参加した「寺市」の開催もまた宮川さん自身の「菩薩行」の実践であり、モリくんとは別の形で「コモン」の再生を目指しておられると感じた。

鳥取く東京・妄想の駅そば旅

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

鉄道マニア、いわゆる「鉄ちゃん」なんてどこが楽しいんだろう、と長い間思ってきた。ところが最近、B S Tにはまって、少々ぐらついている。「麵鉄くメン食い鉄道 絶景の旅」

案内役のモデル、市川紗椰の生半可でない鉄道知識と、何といっても彼女の「駅そば」の食いつぶりが見事なのだ。麵をきれいに平らげ、汁は豪快にズズツ。そして幸福感あふれる美しい完食の笑顔。

「こういう人生の楽しみ方もある…」。いや、ひよっとすると、鉄ちゃんをバカにしてきた自分自身の心の奥底に、その志向性がありはしないか。胸に手を当ててよく考えてみよう。そういえば。

◇ ◇ ◇
東京で勤務していた4年前の夏、初孫が生まれたので、

名古屋の病院まで会いに出かけた。東京から名古屋なんて、新幹線に乗れば片道たった1時間半である。なのに「これをすべて普通列車で乗り継いで行ったら、どうなるだろう」などと妙な気を起こし、「ヤブー路線情報」で乗り継ぎを調べて出かけた。

確か午前5時半、押上から東京メトロ半蔵門線の始発に乗り、名古屋駅に着いたのが6時間半後の正午、それから孫の顔を見て、明るいうちに東京に戻る電車に乗ったが、押上には終電でぎりぎり着いた記憶がある。

時間はべらぼうにかかったが、電車賃は往復1万3千円(新幹線なら2万円超)。すごく得をした気がして、奮発して東京駅で買った高級な「まい泉のかつサンド」を、熱海駅のプラットホームで(普通電車なのでたびたび乗り継ぎ下車がある)海を眺めながら味わったつけ。静岡駅ではレトロな「東海軒のサンドイッチ」とビールを買い、車窓から浜名湖を眺めながら、ほろ酔い気分…待てよ、これはまさに「食べ鉄」「呑み鉄」の世界ではないか!

◇ ◇ ◇
いさぎよくカミングアウトしよう。
どうやら私は「鉄ちゃん」らしい。

◇ ◇ ◇
そういえば会議で東京―鳥取間を往復する際は飛行機が使えたが、鳥取便の搭乗ゲートは一番遠く、それもと

びたびバス輸送に回される。「田舎だと思つてバカにしゃがつて」。途中から新幹線↓姫路↓スーパ―はくとの鉄道移動に切り替えたが、あれはフロイトの言う「心の深層にある欲望がなせる無意識的選択」だったかも知れない。

おかげで帰りの姫路駅の「御座候」でアンコたっぷりの大判焼きが土産に買えるようになり、支社の皆が喜んでくれた：ま、どうでもいいことだけど。

◇ ◇ ◇
コロナ禍のおかげで、すっかり旅に縁遠くなってしまった。皆さんもそうだろう。

こんな時、鉄道は「妄想の旅」に出かけられる（実はBS-1日テレの「友近・礼二の妄想トレイン」＝時刻表を片手に妄想の鉄道旅を楽しむ番組もビデオに録って観ている。もうどうしようもない正真正銘の「鉄男」である）

最近「妄想」しているのは、鳥取からずつと「駅そば」を食べながら東京を目指す旅だ。多分に先ほどの「麵鉄」の番組の影響がうかがえる。

倉吉駅から始発に乗ると、鳥取駅の「砂丘そば」が開店する2分前、6時28分に到着する。あごちくわの入ったそばを朝一番に味わい、スーパ―はくとに乗り換えて姫路駅へ。

姫路駅は終戦直後、小麦粉の代わりにそば粉とこんにゃ

く粉を混ぜて麺にした歴史を持つ、その名も「えきそば」が有名。麺が少しラーメンぽい。学生時代、京都から岡山に帰省途中、乗り継ぎで必ず立ち寄った「青春の一杯」でもある。「とり天そば」が美味い。

新快速で大阪に向かい、単身赴任中よくお世話になった駅構内の「しおつる」で名物「カレーあんかけ」を注文。ここは昼遅く行くと居酒屋に変身、センペロになれる。

京都駅はやはり「にしんそば」。年末の高校駅伝の取材で新幹線コンコースにある「松葉」によく通った。

滋賀県は米原駅内の立ち食いそば「井筒屋」がいいが、北陸新幹線ができて乗り継ぎ客が減り、残念ながら在来線は昨年閉店、新幹線ホームはまだ健在という。

名古屋駅は言わずと知れた「名代きしめん すみよし」。ここら辺からツユの黒さが増してくる。仕事でたびたび訪れた浜松は駅改札口を出てすぐ、「おらが蕎麦」で浜名湖産(?)のうな丼とセットで頼むのがお得だ。

…と、東京にたどり着く前に紙数が尽きてしまった。古来から「旅」は目的地に着くより、途中の風景や土地の味を楽しむものだった。リニア新幹線など愚の骨頂。「妄想の駅そば鉄道の旅」は、まだまだ続く。

迷い「む靴下

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

先日、片方だけ靴下がなくなった。洗濯機から出てきた靴下は片方だけで、もう片方は見当たらなかった。もちろん何種類か靴下を持っているため、それがなくなってしまうところで日常生活に大きな影響が生じるわけではない。しかし、なくなった経緯が不鮮明なままというのは落ちつかない。だから洗濯カゴや洗濯機のなかを探してみるが、見つからない。私は洗濯機がまわりはじめる前のことを思いだそうとし、時間をさかのぼることにした。でも靴下のことを考えつづけながらそのあいだに食事をささむことで思わぬ方向に時間は逸れていくことになる。

かつてダイニングチェアの4つの脚には靴下があった。それは椅子をひいたときにフローリングの床に傷がつかないようにするための専用の靴下だ。そしてそのころ、2匹

の犬がいた。室内ではなく室外で暮らしていたふたりの犬種はコーギーとキャバリア。そのうちのコーギーのほうの話になる。コロという名前のそのコーギーは小麦色と白色の毛が気持ちよく、一般的にコーギーがそうであるように脚の短い犬だった。小麦色の胴体に対して短いその脚を包んでいる毛は白く、まるで白い靴下を履いているようだった。夏だからといってそれを脱ぐというわけにもいかず、白い靴下を履いていて暑くはないのかと冗談で訊ねた夏もある。冬には降り積もった白い雪に足を取られ、しかしそれでもその上を忙しなく駆けていた。

活動的なコロは、勝手口が開いていればその隙を逃さなかつた。いつのまにか室内に入りこんでいることがよくあったし、車が走る外の世界へ脱走することもしばしば。そのたびに怒られ反省した顔をするのだが、しばらくするといつもの調子に戻っている。だからいつもの調子で室内に入りこむコロはダイニングチェアに履かせた靴下を口でくわえてひっぱり、それを脱がしてしまう。そして室外に戻っていくわけでもなく、その場に靴下をくわえたまま座りこむか、あるいは室内の奥へ向かい、手に入れた靴下を気づかれるまで噛みつづけている。その現場を目撃されるとコロは立ち上がりゆっくりと逃げていくのだが、いつもこちらが歩いているとすぐ近づいてくる一方でこの状況に

なると遠ざかっていくということは、多少なりとも後ろめたさがあるということなのだろう。

なぜその靴下がほしいのかはわからなかったが、コロはある日その靴下を食べてしまった。好き嫌いの少ない犬だった。とはいえ消化されないダイニングチェアの靴下は、やがてコロの体内から出てきた。口からではなく、その反対側から。飽き飽きしていたのかもしれない、いつもの「白い靴下」に。もしくはダイニングチェアが履く茶色い靴下をうらやましく思ったのかもしれない。それとも毎日の様々な食事のにおいがそこに染みついていたのであろうか。そんな可能性をいくつ想像したところで本当のところはいままでたつてもわからないままだし、いつまでもわからないままだから、こうして私のなかで記憶としてひっかかって消えることがない。

私の黒い靴下が片方だけなくなった次の日、その靴下が出てきた。電気ストーブのにおいに冬を感じる日曜日の午後、室内で裏返しにして干していた緑色のトレーナー。そのトレーナーのゆるくはない袖口付近において、まるまった靴下の片方が見つかった。両手の袖口が天井を向くように洗濯バサミで固定して干していたため、トレーナーのなかにひっかかる靴下は床に落下してこなかった。でも、その不自然な袖口付近のもこもこに気がついた。洗濯機のな

かでまわりつづけるうちにトレーナーの袖口付近に迷いこんでしまったらしい。

こんなことはよくあることではない。どれだけ洗濯機をまわしても、衣服のなかに靴下を迷いこんだままにさせることは容易ではない。ただ、まわしつづけるからこそ、ある日こうして靴下は片方だけ見当たらなくなることもあるのだろう。袖口付近で見つかった靴下は、これからも私と外の世界へ出かけていくはずだ。それはつまり、そのたびに洗濯機がまわるということ、そこには迷いこむ靴下をどこかで期待している私もいるのだろう。

宇宙をめぐる

松田 裕史

(高校教員)

九月の終わりから一か月ほど、暇さえあれば宇宙関連の書籍を読んだり動画を視聴したりする時間を過ごした※。宇宙開発をテーマとした授業を行うためである。あるテーマに指導者が興味があったとしても生徒が同じように興味を持っているとは限らない。むしろ、興味がないほうが多いだろう。初動における動機づけが大事だろうと思ひ、鳥取と宇宙開発の関連を調べたりもした。「とつとり宇宙産業チャレンジ事業」という県が推進するプロジェクトがあり、意外と鳥取と宇宙はつながりがある。例えば、JAXAと連携したり、宇宙機の部品を製造している企業がいくつある。十一月十三日には amulapo (東京) という企業が鳥取砂丘を月面都市に見立て、宇宙飛行士の仕事や生活を疑似体験するイベントを開いている。そして、鳥取市との縁で忘れてはならないのは世界初の人工流れ星を実現しようとしている(株) ALE の CEO、岡島礼奈さんである。これらの情報を生徒に提示し、動機づけと自己関連性を高

める手段とした。

所謂、教科横断型の授業になるが、教科横断を謳った授業の多くは教科横断を目的としている。教科横断はあくまで手段であって目的ではない。単元や授業のゴールに迫るには教科横断が必然だったという方が理に適っている。よって、重要なのは単元を貫く(発)問になる。今回は「Which is more beneficial for humans, colonizing Mars or searching for extraterrestrial life? (火星の植民地化と地球外生命体探査のどちらが人類にとって有益か?)」という、荒唐無稽ともいえる問を設定した。無論、この問いに答えはない。最適解を生み出すのみである。

この単元に約十時間費やしたわけだが、なんとなく上滑りしそうな嫌な予感が始める前にあつた。長所、短所を踏まえて議論することはできるだろうし、見た目はコミュニケーション活動の体裁を整えたそれなりのものにはなるだろう。だが、本当にそれでいいのか?そこに何か学びはあるのか?自問自答の日々が続いた。そこで出会ったのが ALE のホームページに掲載されていた岡島さんのメッセージだった。「科学を社会につなぎ 宇宙を文化圏にする」というミッションに始まり、「地球環境」「人類」「サステナビリティ」などがキーワードとなる、壮大で深淵なメッセージが語られている。これを読めば ALE が目先の

利益に一喜一憂する営利企業でないことが分かるだろう。このメッセージの英語版を教材化し、生徒と共に学んだ。単元に命が吹き込まれる感覚を覚えた。岡島さんの掲げられるミッションやヴィジョンは生徒の価値観や世界観を広げる契機となりうるもので、単元を単に情報のやり取りに終わらせない重要なファクターになった。イーロン・マスク率いるスペースXがなぜ火星に注目しているのか、またジェフ・ベゾスが手掛けるブルー・オリジンがなぜ宇宙を目指すのか、その理念も教材化しインプット材料とした。メディアでは報じられない米国の大企業の理念を知ることがそれなりに面白かったが、生徒がより目を輝かせたのは岡島さんのメッセージであったことは言うまでもない。大入試でも九州大学、神戸大学、東北大学、慶応大学、大阪教育大学などが過去に宇宙開発をテーマとした英文を出題しており、それらも併せて読んだ。

十一月一日の公開授業はオンラインで岡島さんをはじめALEの三人の方に視聴していた。幸運に恵まれた。授業の中盤、生徒たちは三人グループを作り前述の問いについて丁々発止の議論を展開した。僕も敢えて生徒を困らせる質問を投げかけ議論を楽しんだ。この一週間後、まとめとして少し設定を変えたインタビュ活動を行ったが、ほとんど全員がメモすら見ることなく英語で持論を語りだす

類まれな瞬間に出会えた。これもALEの皆さんのお陰である。

宇宙を舞台としたビジネスは加速度的に展開されるだろう。地球上からフロンティアが消失した今、ネット空間と宇宙が新たなフロンティアとしてビジネスの対象となる。しかし、宇宙に関して言えば、例えば火星を植民地化する権利が人類にあるのか、あるとすれば国際的なルールはどうなるのかなど倫理的、政治的課題が残されたままである。背後に資本主義の顔が見え隠れもする。気候危機、貧困、戦争、経済格差など目の前の難題を解決することが先決だとする意見もある。それでもなお宇宙を目指すとなれば宇宙を「コモン＝共有地」として捉え直すのはどうだろうか。ALEの「宇宙を文化圏に」という発想には、コモンを感じる。だからこそ僕も生徒も岡島さんのメッセージに魅了されたのだと思う。

※「音信不通(第六十二号)」において寄稿者の芝野先生は「るるぶ宇宙」に言及されていて気になっていた。この一月ほど「るるぶ宇宙」は僕の愛読書だった。最終ページにはALEも紹介されている。また、「学び祭」もそうだが、四半世紀前から芝野先生の授業はすでに教科横断だった。

あとがき稼業① ～コロナ禍での出版～

芝野 浩貴 (地球探検家)

選挙が終わり第6波について言及されている時、2021年もあと2ヶ月を切ったところでこの文を書いている。選挙のパラドックスなどアローの不可能性定理を説明する時など、「きめ方の論理」(佐伯胖著、東京大学出版会、1980年)には参考文献としてたくさんお世話になった。無職になってからは本を購入することができないので、新刊は書店や図書館でチェックしているが、「きめ方の論理」が別の意味で印象深いのは、ちくま学芸文庫として「文庫化された本の解説は誰が書いているのだろうか?」と手に取った時、店員さんが書棚の本を一斉に片付けたからである。鹿児島島の書店だった。数日後に廃業となるので、実質は閉店だが、店を開けながら在庫処分しているのである。コロナ禍で全国遊脚していると、どの街も工事の量が半端なく多いことに気がつく。私が今一番気にしているのは、数十年前に作った道路やトンネルや建物の老朽化問題である。A1で点検は随分楽になったものの、それはデータ分析の話で、少子化や専門家の不足により、実際誰が多くの欠陥部分を修理するのかの問題は深刻化している。各業界とも人的交流の少ないコロナ禍に店を再建しているのである。全国の書店もほとんどん廃店している。私が学生時代お世話になった紀伊國屋新宿本店、三省堂神保町本店も鹿児島島の

書店同様、立ち読みしている最中に棚の本がとられていった。改築するのである。隔世の感がある。再建されても本の販売面積は確実に減るだろう。

都会の大型書店では、田舎では考えられないほどレジでは購入者の行列が出来ている。いつ見ても並んでいる。全ての本が売れないわけではない。しかし、売れる本はハウツー本が多い。誤解を招くことを恐れずに書くと、いい本は売れないと思っている。人がわかりやすさを求める限りは。本を購入する時、選別する時(司書時代の時の選書も含めて)、著者の経歴や増刷回数や帯や奥付、書評、解説、あとがきを参考にする。蒐集家は、同じ本でも解説が異なれば購入する。「書評稼業四十年」(北上次郎著)という本でもわかるように、書評のプロがいて、各新聞での書評を読んで購入することもあるだろう。だから、あとがきの大切さはわかつていりつもりである。あとがき書くのは大変だと思う。

いつのまにか私は、本を買う側や読む側でなく、書く側や作る側の立場にもなっていて、コロナ禍の2年間、私が費やしたことの多くは「あとがき書き」となっている。「あとがき稼業」とでも言うのだろうか。人間誰でも自分史を書けば最低1冊の本を出版はできるだろう。しかし、数冊出版する人の数は絞られ、さらに時間も考慮して、年間数冊の本を出版する人はもつと限られる。新書を乱発する人いるが、そういう本は1冊10分で読めるが…

私があとがきを書いている本の著者はS哲人である。数理哲人という

名前の由来の通り、数理的な考察はもちろん、哲学、人文系にも通じ、法科大学院も卒業しているので法律にも精通しており、社会への切り込みも鋭い。20代の中に過去の東大の問題を全て自力で解き、その後は発問者として、そのレベルでの自作問題を1000題は創作しているので、受験数学界では有名だが、彼の本はベストセラーになってない。(聖文新社も昨年廃業)

彼は挿絵や製本を除くすべての本の製作作業工程を一人でやるので、出版のペースが速いのである。(講義本時は内容が視聴できるのPCコード付)かつてはテープ起しだけでも大変だったのをAI機器を使って校正を素早くするので、1ヶ月もしないうちに本の原稿が送られてくる。左はコロナ禍で私が書いたS哲人の本のタイトルで、()内の日付は私があとがきを書き終えた月日である。今手元に4冊分の原稿もあるので、年末には30冊近く書いたことになる。

『2021年刊行分』

視野を拓げる別解 MANNA(11.9)、殿堂入りの名問を板書美術館Ⅰ・Ⅱ(11.7)、下関南高校に育む關魂Ⅱ(10.31)、遊歴算家の証言Ⅷ(7.23)、気仙沼高校に育む關魂Ⅲ(6.23)、数学を奏するための数楽譜Ⅱ @福島(6.15)、数学を奏するための数楽譜Ⅰ @那覇(5.10)、沖縄の高校生に育む關魂Ⅱ 宮古島編(4.25)、下関南高校に育む關魂Ⅰ(4.20)、社会的知識の数学的知識Ⅲ(2.20)、社会的知識の数学的知識Ⅱ(1.16)、遊歴算家の証言 2020(1.9)

『2020年刊行分』

新数学教育観に応答する字びⅡ(12.3)、沖縄の高校生に育む關魂Ⅰ本島編(10.31)、社会的知識の数学的知識Ⅰ(9.14)、気仙沼に育む關魂Ⅱ(9.10)、新数学観の地平を拓くⅡ模擬問題(8.11)、新数学観の地平を拓くⅠ試行調査(8.6)、遊歴算家の証言Ⅶ(7.3)、遊歴算家の証言Ⅵ(6.5)、新数学教育観に応答する字びⅠ(5.8)、遊歴算家の証言Ⅴ(4.27)、数学を奏する授業(3.23)

この一覧は、私があとがきを書いたものだけなのでまたまた哲人本の一部である。彼の本はギネスブックに載るくらいの出版本の数を誇る。人様の売り物なので私も息が抜けないのである。ニートンやデフォールのように、コロナ禍だからこそ熟成された思考の本が続々と世界中で書かれていることだろう。

今年は共通テスト元年で、来年は新学習指導要領施行元年である。右記のS哲人の本は書店では購入できなくて、プリバスのウエイショップからの購入となるが、11月に私とS哲人の共著が現代数学社から発売されている。今、教育と社会が、AIと数学が、どうかかわっているのか考察をした本である。これは書店で購入可能なので、手に取ってもらえば、哲人本(情報量が多くて1時間では読めない)への扉が開かれると思う。

『共通テスト数学における質的变化の研究』

(シヴァ神・黒岩虎雄共著 現代数学社 2021)

注 シヴァ神は芝野浩貴の異名、黒岩虎雄はS哲人の異名である。

八代日記 (二十一)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

十月某日

漫画を久しぶりにゆっくり読めた。大山海『奈良へ』(リイド社)。帯と解説にもあるが傑作だった。それ以上はいつものごとく上手く言えない。思えばPOPの書けない書店員であった私は。つげ義春から異世界系までの技法を駆使し、ここまで無常を描き切った漫画を知らない。素晴らしかった。書店員であったなら、コミックコーナー以外で文芸・人文書の棚前にも積んだだろう。

十月某日

またも漫画を読む。すぎむらしんいち『最後の遊覧船』(小学館、全2巻)。『ディアスポリス』以来、十年ぶりにくらしい氏の作品を読んだ。映画にしてほしい良作。

ツイッターで大友克洋が「映画化の権利をくれ」と言っていたのを読んだような気がするが改めて探すも見つからず。ホン・サンス、撮ってくれないかな…。水辺と複数の

男女のコント。

十月某日

さらに漫画を読む。つげ忠男『昭和まぼろし 忘れがたきヤツたち 第1集』(ジーオーティー)。COMIC MeMuというサイトでの連載を単行本化。山田参助さんいわく「焼け跡劇画最高峰」。感動した。

大きな画面でサイトを観ていただくと特にわかると思うのですが、ページの佇まいが美しいんです。素人の知ったかぶりで申し訳ないですが、美しいと思いました。あとがきに「完成は無理かもしれない」とあるが、2巻も楽しみにしています！これも書店員であったならば、現代史コーナーでいける。

十月某日

メンバー全員ワクチン接種も完了し、緊急事態宣言も解除されたということで、恐る恐るついに東京へ練習に出向いた。

移動中の電車内を見回すと、吊り広告がかなり減っていた。こりやいろいろ敵しいというかフェーズが変わったのだらうなと推測。扇情的な週刊誌の広告はそんなに見たくはないからホッとはする。あれがあるのかないのかで

集団の無意識がだいぶん違ってくるんじゃないか。でもネットニュースとか見れば同じなのかな。

どこにも寄らずにスタジオ直行。9ヶ月ぶりくらいにメンバーと再会。連絡は取り合っていたのでさほど久しぶりという感じもなかったが、最初の何時間かは演奏がガタガタだった。徐々に勘を戻していくしかないが、以前とは違うフォームにたどり着く予感。変化を強いられるだろうが、上手く受け入れていかねばなるまい。

22時半まで練習後、泊めてもらうメンバーの家まで歩いて帰る。40分くらい歩いた。東京は歩けるのがいい。

翌日も朝からスタジオ。4時間練習して、そのまま空港へ向かう。練習10時間の1泊滞在。

途中に書店で永野護『ファイブスター物語』（角川書店）の16巻を発見し購入。自分は漫画を読むのが遅いが、ファイブスターに関してはいつも以上に遅い。多分2時間でも読み切れない。読むときは物語に没入したいので、時間が取れそうな時までお預け。

鍵が無いのでないのなら　うちに帰ればいい

そこで待ってる音楽が

あれば知らない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

空を飛んでくそのの　迎えが無いのなら
何を待ってりやいいんだろ
あとはいらない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

そこに立ってる幽霊の　意味が無いのなら
朝を待つしかないんだろ
あとはいらない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

霧がかつてく風景が　夢じゃないのなら
朝を待つしかないんだろ
あとはいらない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

あとはいらない　もう知らない
何も知らない　もう知らない

（ケバブジョンソン「知らない」作詞・杉浦真寛）

あなたは…誰ですか

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

と言う台詞が、谷山浩子の歌にあった、ように思う。

「子取りが来るぞ」

と、子供の頃、よく祖父母に脅されたものだ。

日が暮れても遊びに夢中で、家に帰ろうとしない時などに、専ら使われた。

子取り、とは、むかし風に言えば「かどわかし」、現代なら「人さらい」（これも久しく聞かないような）か、もう身も蓋もないけれど「不審者」と言った所か。

昭和ひと桁の父親世代だと、「赤マント」ということになるらしい。真赤なマントを纏った姿は、「子取り」よりも具体性があつて、色合いといい、姿形といい、非日常的で、より禍々しさが際立って見える。

こういう都市伝説があつたからこそ、『怪人二十面相』の冒頭の文章が活きてくる訳だ。

以前、職場の同僚から、ムラカミさんの名前を出すと、子供の聞き分けがいい、と聞かされたことがあつた。（その同僚には、出産時や誕生日に、絵本や仮面ライダーの人形などを贈っていた）何でも、その家では、悪さをしたり、食事の好き嫌いをしたりすると、「ムラカミサンが怒るよ」と言つて叱るのだという。「ムラカミサン、怒る？」「怒る」「じゃ、食べる」といった按配らしい。その子の思い描くムラカミサン像は、如何なるものか存じ上げないが、ナマハゲやボゼの如き異形の姿でないことを願いたい。

第三者に仮託して、子を叱る、というのは如何にも「世間体の国」日本らしい独特の風習と言えるだろう。（例：「あそこの小父さんが怖い顔して睨んでるから、静かにしなさい」）

落語の小言幸兵衛は、口やかましい大家をそう绰名して揶揄したという話だが、段々、元ネタを離れて、単にやかまし屋をさす代名詞としても使われるようになった。

よく似た言葉に、石部金吉がある。完璧を期するなら語尾に「金兜」を付けるとよい。コチコチ頭で融通の利かない朴念仁を言う。

この言葉を見る度に思い出す名前がある。石井伊吉という俳優である。子供の頃、欠かさず見ていた「ウルト

ラマン」「ウルトラセブン」のクレジットに必ず出ていた名前だ。字面のイメージから類推されるとおり、がっしりした体格で、頭の固い硬骨漢を演じていた。その後、改名して、今では特定年齢層に絶大な人気の男優だ。

骨皮筋衛門というのもあるが、これは注釈は必要ないだろう。

珍野苦沙弥や大山デブ子はフィクション中の人物だが、世の中には「倫敦巴里子」なんて漫画家がいるし、実在した人には「法螺吹蔵」氏とか「腰巻メ太」氏とかいうのがあるようで（『昭和珍名録』）、「和合する子」さん、なんてえのに至っては、ほんまかいな、と言いたくなるけれど。（『大正珍姓名番附』）

近頃では、とんと見なくなつたが、ヤジロベエという玩具は、『東海道中膝栗毛』の主人公の一人・弥次さん（弥次郎兵衛）に基づく命名だそうだ。何でも、旅の振り分け荷物を、棒手振りよろしく天秤棒にぶら下げて歩いた姿が似ている所から付けられたのだという。

今では完全に姿を消したが、かつてテープレコーダーというものがあつて、通称「デンスケ」と呼ばれていた。デン

スケ賭博から付いた名称で、これを摘発した刑事の名前にちなんだのだそう。

「田道間守」はお菓子の神様だが、「薩摩守」は犯罪用語。無賃乗車のことで、薩摩守・平忠度の「忠度」と「ただ乗り」を掛けたというのは、よく知られた話。

出歯亀という言葉があるが、こちらは「デンスケ」とは反対に、実在の犯罪者の名前から取られたものだ。死して皮を残すにしても、これは一寸、な例であろう。面白いことに、英語の「ピーピング・トム」も、伝説上の人物の名前に基づいている。ベルギーのチョコレートメーカーの名前や商標の元にもなった、ゴダイヴァ夫人の故事に由来する。

国家や国民気質を擬人化して、アメリカをアンクル・サム、イギリスをジョン・ブルと言う向きがある。ロシアのことをイワン・ドウラーク…とは流石に言わならしい。

鳥取あれこれ その六十四

内田 克彦

(地域研究者)

(承前)

佐伯は『「武国」日本』により、「世界を一周し、二十年も外国を見てきた漂流者〔音吉のこと〕がこのようにことを言っていたということに対しては、いささか奇異な印象を抱く」として、次のように論を展開している。

江戸時代にはさまざまな物語を通じて、「武国」意識が庶民に浸透していったのではないか。尾張の水夫音吉が幕末に残した言葉は、そうしたことの結果だったのではないかと思われる。

さて、奥多本及び尚徳館本以外に、嘉永七年、長崎に利七を引き取りに行った村瀬弥兵衛が帰国の途中に聞き取った、『漂流人異国噺』がある。聞き取った時期が一番早いのであるが、余り知られていない。茂住による翻刻文(『大倉山論集』一九九九年刊)の底本は、県立図書館蔵である。この本の冒頭に、利七の素性が書かれており、その点からは貴重な本である。

既に、安藤文雄「尚徳館碑史『漂流人帰朝咄』」(『鳥城 第二〇号』、一九八七年刊)、井上朋義『漂流人異国噺 全解説・論考』(一九八八年刊)により翻刻されている。

なお、井上著は、播磨町が一九九七年に発刊した『町制施行三十五周年記念 怒涛を越えた男たち―漂流史料研究集―』に再録されている。これは、アメリカ彦蔵(ジョセフ・ヒコ)をはじめ、栄力丸乗組員一七名のうち八名を占める水夫の出身地である播磨町だからのことであろう。

前掲の井上著には、県立博物館蔵で、『亞墨利加江漂流人文太郎』(上に貼り紙で「長瀬村文太郎阿免りか行之事くわしく」とある)と『河村郡長瀬村文太与申者異国へ漂流一条申口聞取書』(「昭和六十三年度資料調査報告書第十六集―旧鳥取藩士田中俊民家資料―」の中にある。)の二冊がある、との記述があり、井上は「調べてみると、二冊とも村瀬が記録した『漂流人異国噺』と、内容そして文体においてほとんど同じである」として、「どうやら『漂流人異国噺』をそのまま書き写して、別の表題をつけたものと思われる」と書いている。県立博物館に出掛け、二つの所蔵本を詳しく見ると、両方とも前書・後書がなく、村瀬弥兵衛の名前が出てこなかった(前者には、「与太

郎事文太」とある)。

さらに、これらのほか、『唐嘶浜伝記』なるものがある
と、『江戸時代人づくり風土記 3 1 鳥取県』(一九九四年刊)の中の、妙泉弘宣著「伯耆の漂流民利七の幕末海外
体験」の項に記述されていた。それによると、「帰国後、
利七が鳥取藩家老の倉吉荒尾家の奉行所で口述した口書
である」とあった。

茂住による翻刻シリーズには取り上げられておらず、ど
のような写本かと調べてみると、『羽合町史(前編)』(一
九六七年刊)の「六、利七漂流奇談」の項の中に、「昭和
十二年二月鳥取市横山書店から、倉吉の篤学者河島雅弟氏
に贈られた文太(利七の後名)口述書なるもの」で、「こ
の毛筆本は「唐嘶浜伝記」漂流人文太口書と表記され、鳥
取藩下、倉吉荒尾家の奉行所での口述書の写しらしい」と
書いてあった。

ところが、記述された内容を詳しく見ると、『漂流人異
国嘶』を写したものであった。

さて、利七は帰藩後、どうしたか。堀敦斎は『漂流記談』
の「序」で、「官命為尚徳館使令。賚〔たまふ〕月棒若干。
許帯刀。」と記述してあるように、尚徳館に出仕している。

藩主池田慶徳は、吉岡温泉に湯治の際に、利七から外
国の事情を直接聞き取った、とされている。残念なこと
に、その後、利七は「氣に病んで」(前掲の松岡著)長瀬
に帰され、明治二年に亡くなった。播磨町の井上は、その
著の中で、利七を思つて、次のように書いてくれている。

帰郷後、同じように下士としての扱いをうけた、かつ
ての仲間、姫路藩の「略」四名が、造船の仕事に携わつ
たのと違い、文太を取り巻く雰囲気は極めて堅苦しいも
のだったのではなからうか。

松岡は、その著の中の「帰国後の利七」の項で、長瀬の
村人から聞き取った内容を次のように記述している。

長瀬では外國の事情を色々紹介した。戸田たきの古い
記憶によると羽合屋の座敷に多数の村人が集つて聴い
た。正面奥に炬燵やぐらを置き其の上にたたんだ蒲團を
置いて其の上に利七が座して語つた。カツポウナイサン
プライシシコ等とわけの分からぬ言葉を話したから皆々
驚(オドロ)いた。

(この項、了)

二〇二一・一一・二二

「山椒魚」 舞台と音楽

秦阜 梅林

(楽人)

0

井伏鱒二の小説を其の儘(戯曲化せず)芝居にした鳥劇版、一昨年GWに初めて舞台化した旧版は、2人の女優の演ずる形だったが新演出は、男優2人に、書き下ろしオリジナル音楽を全編に鏤めたもの。楽器(無伴奏ヴァイオラ+²)の奏でる生演奏を含め三人に依り舞台の繰り広げられる趣向：

2人の役者は、或るひは山椒魚の分裂心理の対話を試み、或るひは山椒魚と蛙、小海老、水スマシ：そして黴や藻の花といった水辺の生き物達を対比させたり、徒然にナレーションを挟み自在なイマジネーションを膨らませつゝ水の中戯れる：

I

主人公である両生類、南は高知、北は鳥取：中四国にだけ棲む例の少々グロテスクな特別天然記念物は、二年の間すっかり肥満し、頭が痞て岩屋の穴蔵から出られなくなつた：そんな宿命、悲喜劇を福山出身の作者が独特

なペーソスを交へ描いたもの、動物の姿を借りた人間、インテリゲンチヤアの哀しひ独白はやがて強烈な不条理劇となつて文豪の筆がいよいよ冴へ渡る：

II

僕にとつては「裸の王様」に続く劇音楽：生バンドによるミュージカル作品として愉しひエンターテイメントに徹した前作とは然し、或る意味眞逆の行き方で模索した：

外界から遮断され陽の当たらなひ狭ひ空間に封じ込められた閉塞感：運命を呪ひ、神と対話し、他者を徹底的に羨み蔑みひたすら焦燥を募らせる尊大孤独な主人公：明るひヴァイオリンでも、輝かしひチェロでもなく、敢へて仄暗ひ燦んだ音色のヴァイオラ、しかも無伴奏：徹底的にモノフォニーに拘つた音楽は、所謂ちよこつと添へ物の「劇伴」では無く抽象的に此の物語を語り、まうひとつの芝居を形造り、ハイテクのヴィジュアルやら大掛かりなセットをあれこれ持ち込むのでは無く、視聴者に簡素で立体的なポリフォニーを投げ掛ける：

III

以下、音楽ナンバーを列記して解題に代へやうと思ふ。

これらは原作、或ひは演出に設へられてゐたり、特に提示されたものでは無く、筆者が予め、或るひは役者との現場で便宜上拵へたもの。

2021. 11. 10

序奏、「山椒魚」の主題〜1 第一場〜2 岩屋のシチリアーナ〜3 若者のブルース、4 バガテル「杉苔、錢苔の密生」〜III 5 「谷川のスケルツォ」 6 「メダカのトッカータ」

7 夜想曲（ノクターン） 8 「小エビのポルカ」

9 悲歌（エレジー） 10 「悲しい間奏曲」（インテルメッツォ） 11 「水スマシと蛙の奇想曲」（カプリチオ） 12 「ブリキの切り屑」の哀歌 13 「啜り泣き」、ソスピーリー
14 「妬みの円舞曲（ワルツ）」 15 「愚か者（達）のレチタティーヴォ」 16 「変容」ラ・メタモルフオーザ
17 後奏〜「山椒魚の主題」

「山椒魚」は、12月25（土）、26日（日）

「クリスマスはとりぎん文化会館であそぼう！」⑤鳥の劇場の子ども向け上演で初演（「がまくんとカエルくん」と共に） 予定…

会場とりぎん文化会館 フリースペース

17 00〜18 30

お問い合わせ 特定非営利活動法人鳥の劇場

0857-84-3268 info@birdtheatre.org 迄

今月の一枚 (DVD)

「本日休診」 井伏鱒二原作

渋谷実監督、柳永二郎、角梨枝子、鶴田浩二、淡島千景、三國連太郎、長岡輝子、岸恵子、佐田啓二 他 松竹、1952. 2月

（追記）此の拙文、初演に先立つ事一か月に書かれたもの、上演の内容は演出等に依り大幅な変更も有り得ます、ご了解下さいませやう。

イラスト 秦阜梅林



私の人生は旅に出てから考えようと思う

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

どうにも目標を決めるのが苦手だ。

何も今に始まった事ではない。子どもの頃、「作家になる」と言いふらしていた理由のひとつは、看護師にも保育士にも宇宙にもいきたいと思って、ならば何にでもなれるように小説を書こうと思ったから言い始めた。

ただ、目標を決めて、それにこだわる人生だったら？
私は仕事をやめようなんて夢にも思わなかっただろうし、鳥取に来ることもなかっただろう。そんな漂流するような生き方が自分の形なのかもしれない。

「村を作って定住する」という考えは新たな発明だった。それを思いついたのは、一万三千年前のことであり、それ以降、私たちは放浪生活をやめ、穀物を栽培するようになった。

だから、今の私たちが時々、移動不足を幻肢痛のように

感じて、遊牧生活に憧れるのも不思議ではない。」

とペール・アンデンションが『旅の効用』で述べている。今や、私だけではなく、世界中が移動不足を感じている。こんな時代だから。——結果的に、この一冊は一年近く積読される羽目になる。

だが、この本を改めて手に取ったとき、私が考えたかったのは、「人はなぜ移動するのか」だ。(サブタイトルにもなっているように。)

この本には、スウェーデン人の作者のように旅することになった人間、旅することに疑問を投げかける人間、様々な人が出てくる。スタンとつく国をとりあえず訪ねることにした若者の旅行記や、ヒッチハイクをする話。作者自身は、繰り返しインドを訪ね、グローバル化から離れた場所に行こうとし続けているらしい。時に、作者は貧困や世界の各地に生きる人々は自分達と同じだとも学んでもいく。

「観光客は、訪問先を、遊歩者のようにふわふわと移動する。そして、世界のすがたを偶然のまなざしで捉える。

(略) だからときに、訪問先の住人が見せたくないもの

も発見することになる。」

と『ゲロン〇観光客の哲学』で東浩紀は述べている。私が自分を捉える時、「旅人」「遊牧民」などのノスタルジックな言い回しはあわないように思う。比較的、私はグローバル化や脱ローカル化したやり方にそって生きている。都市化された生き方に順応しているつまらない方の鳥取移住者だ。一方で、私はどこかで「誤配」による出会いに期待し続けているのかもしれない。アンデンションの経験自体、まさしく『観光客の哲学』で述べられる新しい世界理解のひとつのあり方ではないか。

「旅をすると時折、周囲と何の繋がりもないことに悩む。(略)この疎外感がいちばん強いのは、朝夕の交通機関に乗った時である。周囲にはその町の住民が集まっていて、誰もが一方向に、つまりは目的地をめざして進んでいる。全員が所定の場所に向かっていて。仕事場とか自宅に向かっていての。学校や友人のところに行ったり、トレーニングや恋人のもとへ……。いずれにしても待っている人がいるのだ。おたがいに必要としている相手が。」

見知らぬ街に行くと、その街に私は客としてきているのだが、実際に今私にお茶を出した人はここを生活の場に

ていて、この学校に子どもを通わせたり、裏手にあったスーパーで買い物をしていたりするのだと冷静になることがある。だが、私はそういうことをしない。一時的な滞在者で、この街のシステムの外側にしか入れないのだ。それでも、一旦システムの外側に出られることで、一瞬の自由がある。そして、現実とは一旦距離が置かれる。私が消えた後も、この街では日常が続いていくから。

最近、「浮草みたいな人ですわね」と言われた。

ずっとどこかで根を張って生きることには憧れている。その一方で、自分には根を力強くはることはないだろうとも思っている。ならば、私はきつと漂い続けなければならぬのだろう。

必要とされることはときに重石になってくれる。私を留めおいてくれるものになるかもしれない。私はそんな場所を探し続けているのか。あるいは、私は再びふわふわと漂いたいと思っているのか。

いや、私はきつとここを旅立つ。旅立つことへの寂しさと諦めと高鳴る希望を見つけたのが二〇二二年だった。

背負って生きる日々

ド
ラ
メ
リ
ア

(座敷わらし)



本格的な冬に入った金曜日の朝。いつもどおり自宅を出て自転車漕ぐ。なんだか体が軽い。おや、週末なのに快調だなあ、普段なら金曜の朝は疲れもたまっていて、行くそばから既に帰ることを考えているというのに。×切のある仕事をひとつ終えて楽になったからだろうか。頬に当たる風は冷たいが、気持ちりがきりと引き締まって心地良く、信号待ちをしながら肩を回してみたり……とここまで来たところで、はっと気づく。リュックはどうした。あわてて取って返すと、愛用の黒いそれは玄関にちよこんと座ってわたしを待っていた。

これだけなら、うっかりそういうこともあるよね(そうか?)ですむところだが、白状するとこの二週間前にちょうど反対のことをやった。こちらはある意味もつと重症で、仕事帰りに行きつけの本屋さんへ寄って新刊を眺めるために荷物を置くこうとして、初めて置くべきものがないことに気がついた。このときはもう諦めて取りには戻らなかつた。

不便ではあったが、幸いなことに持つていないと致命的に困るものも入っていないかつたので。

翌朝、職場に行くと、丸っこい小ぶりなそれは、さあもう後は背負ってもらうだけですよ、という風に自席の椅子に座っていた。なくても過ごせるなら、一体わたしは何を毎日背負って往復しているのでしょうか。とその後少ししみみ考えざるを得なかつた。

だから、なんだか肩が軽くてどこまでたつて漕げちゃう!というときは要注意、と思うようにしている。どこかに何か忘れてきてやしないか、その軽さは本当に気持ちの話か、と。



・編集後記:

お天気の悪い日が増えて、カッパと防寒具の同時装備に
試行錯誤しているところです。雨は防げるけど隙間が寒い…

ド
ラ
メ
リ
ア (編集長)

青年の死とその後五十年を生きのびた群像をたどる『き
みが死んだあとで』晶文社と、『彼は早稲田で死んだ』文
藝春秋、が気になります。変化できなかった人と変化した
人たちの物語でした。

奈良敏行 (発行人)